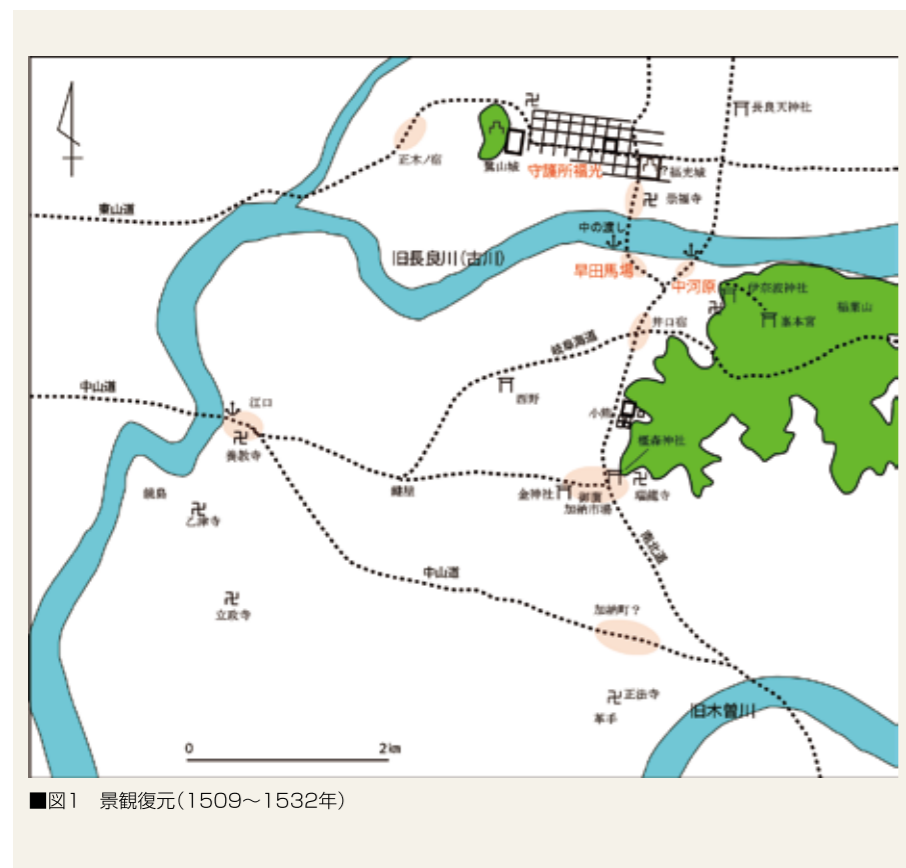




山村氏は斎藤道三が城下町を建設する以前、すでに「中河原」と「早田馬場」という2つの川湊および街道沿いの「井口の宿」があった

### 道三以前

山地を流れてきた長良川は濃尾平野北端に達したところで土砂を堆積させ扇状地を形成してきました。江戸時代に「中河原」と呼ばれた川原町はこの扇状地の一番高い扇頂部に位置します。上流から物資を運んできた舟は、川原町より下流では川が浅くなるために、この場所で荷物の積み替えか陸路を選択せざるを得ませんでした。そのため、古くからここには湊や町が発展していたと考えられています。最近の川原町の工事立会調査によれば円礫が主体となる安定した微高地と新しい時期に造成した場所とがあることがわかってきました。ここでは、歴史地理学者の山村重希氏による最新の研究成果を参考に、戦国時代から近世初めにかけての川原町の変遷を考えてみます。



のだろうと推定しています。早田馬場は長良川の本流だった古川南岸に存在し、「中の渡し」を通過して福光・鷲山方面へと通じていました。大河ドラマ「麒麟がくる」美濃編のクライマックスシーンで、斎藤道三と息子義龍(高政)が戦った1556年長良川の戦いの主戦場が中の渡し(現メモリアルセンター付

近)です。斎藤道三が稲葉山城を大改修する以前、金華山西麓丸山には伊奈波神社が鎮座し、山上には奥宮があったと伝えられています。また、岐阜公園内の織田信長居館跡の発掘調査では15世紀代の梵鐘の鋳型や「大寺」と墨書きされた焼き物が見つかっていますので、この付近

大河ドラマにも昔話として出てきますが、1525年に斎藤道三の父親や主君長井長弘らは守護所福光でクーデターを起こして守護土岐頼武を追放、弟の頼芸を守護に据えます。1532年、頼芸は守護所を長良の枝広(現在の長良公園を中心とする一帯)へ移しますが、1535年夏、長良川が氾濫し井口や対岸の長良・福光一帯に甚大な被害をもたらしました。後世「枝広水」と呼ばれるこの大洪

### 道三・義龍の時代

に伊奈波神社に附属する寺院(神宮寺)があったようです。1509年頃(図1)、美濃国の政治の中心地である守護所が革手(岐阜市下川手一帯)から福光に移ってきます。発掘調査により、福光は京都のような碁盤の目状の町割り(東西1・6km以上、南北0・8km以上)の中に守護土岐氏の館や多数の武家屋敷、寺社、金属加工工房(刀装具制作か)などがあったことがわかっています。長良川を挟んだ北岸に武家の都市(守護所)である福光、南岸に宗教の拠点である金華山・伊奈波神社(丸山)が対峙し、両者は街道で結ばれていました。

## 特集

# 川原町～川湊として 発展してきた歴史

川原町は、岐阜市のほぼ中心部に位置し、長良川鵜飼の乗船場がある地区で、湊町、玉井町及び元浜町の総称です。織田信長の居館があった金華山の麓にあり、古くから清流長良川を利用した海運が発達し、江戸時代には尾張藩による長良川役所が置かれていました。

長良川を利用した湊町として発展してきた町であることから、川を利用して和紙や木材などが流通し、紙問屋や材木問屋といった商家町家群が形成されてきました。

現在は、江戸時代及び明治時代から昭和初期に建造された町家が残っており、美しいまちなみが形成されています。

当所では、長年にわたり岐阜市の将来図にとって重要な役割である長良川周辺の賑わい拠点としての整備推進、また川原町界隈の伝統的発展の継承等に鋭意取り組んでおります。

そのなかで、本号では「川原町～川湊として発展してきた歴史」と題して、岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化財保護課 内堀信雄氏より専門的見識から川原町発展の歴史的史実を分析していただきました。

大河ドラマ「麒麟がくる」美濃編の記憶も新しい今、戦国武将たちの長良川水運や川湊とのかかわりなど、岐阜市の発展の礎を探訪してみませんか。

### 内堀信雄氏 (岐阜市)

(うちぼりのぶお)  
昭和34年 栃木県宇都宮市に生まれる。  
昭和61年 名古屋大学大学院文学研究科(考古学)卒業。  
岐阜市教育委員会にて信長公園跡発掘調査、  
長良川鵜飼習俗調査などを担当。  
現在、岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化財保護課主幹  
■主な著書  
「守護所と戦国城下町」高志書院、平成18年  
「小牧山城・岐阜城・安土城」中世城館の  
考古学」高志書院、平成26年



山村氏は信長期の総構え内の岐阜城下町にある材木町に「長方形街区」という信長以降の城下町に特徴的な形を発見しました。そして文献の分析から、川湊と問屋町である材木町が空間的には分かれないながらも役割としては結びつく「港町」が成立すると提唱されました。具体的な川湊の役割は木材の集積、荷揚げ、製材、加工、保管、積み直し、輸送など。材木町の役割は原材料である木材購入、商品

である舟木の販売、在庫管理、輸送の指示・管理であると推定し、戦国期の舟木商人は材木町に集住していたと指摘しています。さらに山村氏は信長期の川湊の中心は早田馬場で、ここでは木材流送（筏流し）の中継作業と管理が行われ、おそらく後の長良川役所につながる武家領主の管理施設があっ

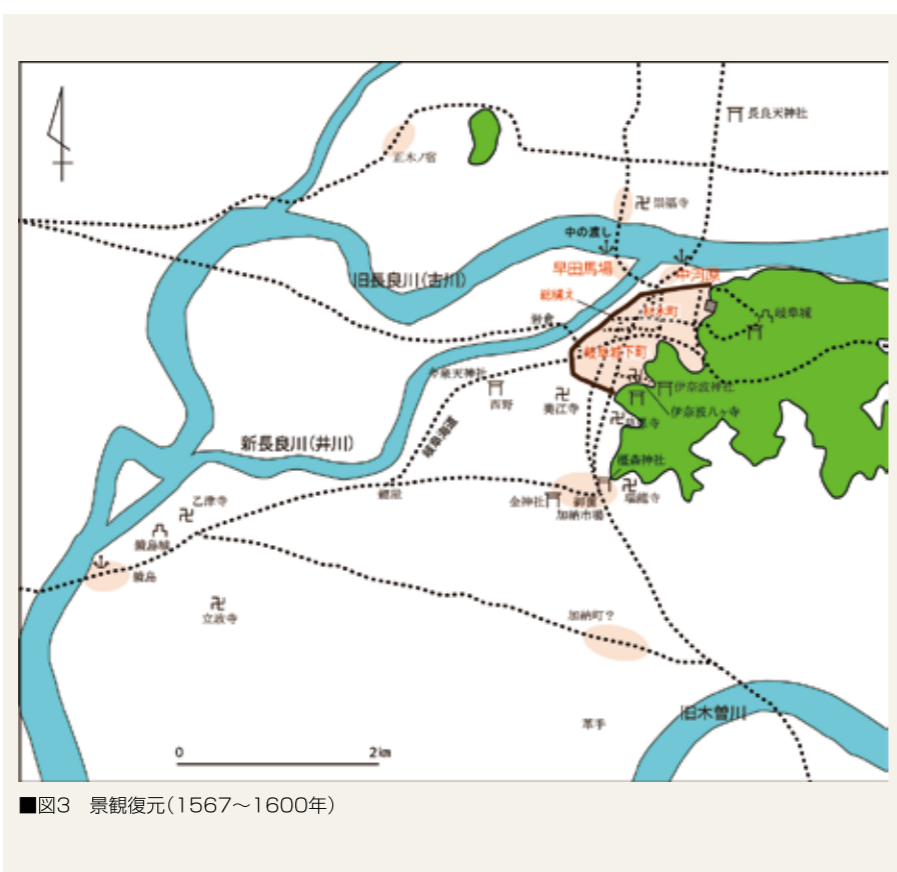
ただろうと推定しています。山村氏の指摘を受けて想像をたくましくするならば、信長は一種の「経済特区」として材木町という新たな問屋町を築いたのではないのでしょうか。その姿は中国返還後の香港と深圳経済特区の関係にも似ているような気がします。

1582年6月2日、家臣明智

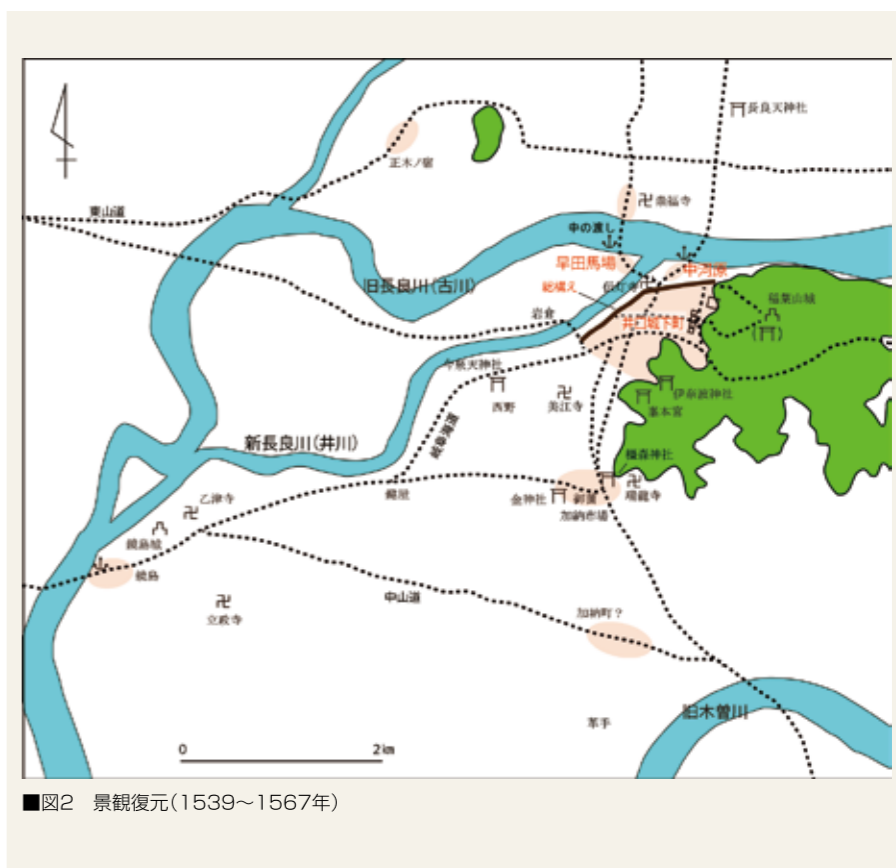
### 信長とその後

1567年(図3)、尾張の戦国大名織田信長は稲葉山城を占領。

小牧山から居城を移して、城と町の名を岐阜と改めます。山村氏によれば、信長期に舟木(造船用木材)取引の特権を持つ舟木商人(同業者集団)12人に対して営業独占権が与えられました。当然舟木商人は信長以前の土岐氏や斎藤道三・義龍の時代にも存在したでしょうから、信長は彼らの権利を保障したということになります。信長というと楽市楽座政策が有名ですが、それは城下町南の加納市場に対してのもので、信長には商人の既得権や慣例を認める一面もあったのです。



■図3 景観復元(1567～1600年)



■図2 景観復元(1539～1567年)

水によって現在の長良川(井川)が生まれたと考えられています。頼芸はこの洪水で館が使えなくなっただけでなく、たまたま北10数kmにある山県市の大桑城へ移転したと伝えられています。

洪水をきっかけに斎藤道三と道三の台頭に反対する勢力が内乱を繰り返しますが、1539年頃ま

に(図2)両者は和睦します。この頃、道三は伊奈波神社などを南の現在地周辺へ移転させ、山上に居城稲葉山城を築くとともに山麓には自らの館を建設しました。道三によって金華山は信仰の山から軍事拠点へと大転換がなされたのです。枝広水で新しい長良川の流路(井川)が出来、元々の川湊・早

田馬場が分断されたことによって、井川沿いに位置する川湊中河原の比重が高まったのではないかと、私は想像しています。道三は稲葉山城の西側の土地に東西道路を2本通し、そこに町人を集めて新たな町(井口城下町)を作ったと伝えられます。南側の東西道路は「七曲通り(本町通り)」で、地元井口の住民を集めます。北側の東西道路は「百曲通り」で、土岐氏の大桑城下町から町人を呼び寄せます。さらに道三は町の周囲に堀と土塁からなる総構えを築きます。ただし、山村氏によれば七曲通りは道三以前からすでに存在していた可能性が高いようです。また総構えも北側は堤防を兼ねて築かれたとみられるものの南側はまだ存在しませんでした。この北側の総構えは今の堤防道路の位置にあたり、発掘調査で確認することは叶いませんが、ほぼそのまま現存していると思われる原は位置しているため、城下町建設から取り残されたようにも見えますが、実際は違うようです。それは道三の息子・義龍の時に起きたある大事件からわかります。1556年長良川の戦いで斎藤道三が息子義龍に敗死した後、義

### 年表

- 1509年頃 守護所草手から福光へ移転。
- 1525年 長井長弘、長井新左衛門尉(道三父)らクーデター。
- 1532年 守護土岐頼芸、守護所を枝広へ移転。
- 1535年 長良川大洪水、井川でできる。斎藤道三と反道三派の内乱始まる。
- 1539年頃 道三・反道三派和睦。道三、稲葉山城大改修・井口城下町建設。
- 1556年 長良川の戦い。道三敗死。
- 1561年 別伝の乱。斎藤義龍病死。
- 1567年 織田信長、稲葉山城占領。居城を移し城と町の名を岐阜と改める。
- 1581年 織田信忠、舟木商人の特権を保障。
- 1582年 本能寺の変、信長・信忠父子横死。
- 1600年 関ヶ原の戦い前哨戦で岐阜城落城。
- 1619年 長良川役所、早田馬場に設置。
- 1636年 長良川役所、中河原へ移転。



光秀の謀反により織田信長・信忠父子は横死。岐阜城主には信長三男信孝が据えられますが、羽柴秀吉との対立から自害させられます。その後、城主は池田元助、池田輝政、豊臣秀勝、織田秀信と頻繁に交替します。記録は残っていませんが、彼ら歴代岐阜城主も信長がはじめた湊町と問屋町からなる港町を維持したのでしょうか。

1600年8月、関ヶ原の戦い前哨戦で西軍についた織田秀信の岐阜城は落城します。覇者徳川家康は岐阜城を廃城とし、商業都市・岐阜町を幕府の直轄領にしました。総構え内外にあった武家屋敷は払い下げられて古屋敷村や明屋敷村が成立します。1619年、早田馬場に尾張藩によって長良川役所が設定されますが、1636年に川瀬の変化によって中河原へ移動します。中河原の川湊が隆盛を迎えるのは、むしろこの頃より後かもしれません。山村氏は、戦国期に舟木商人がもっていた特権は近世には長良川役所へ集約され、舟木売買権のみが薪座株として定着していったのではないかと、また19世紀までに舟木商人の居住地が中河原へと移動したのではないかと推定しています。

### おわりに

以上、山村氏の研究成果に学びつつ、中世から近世初めに至る中河原やその周辺の歴史を斎藤道三や織田信長などの武家領主との関係に注目しつつ見てきました。中河原は道三による井口城下町建設以前から存在し、信長の時代に城下町との関係が整えられます。町の姿は1600年の岐阜城落城以後も維持され、近世・近代を通じて発展を続けました。岐阜市は道三や信長の城下町のみならず、中河原(川原町)のような個性豊かな町が集まって出来ていると改めて実感しました。

#### 参考文献

山村垂希「戦国城下町岐阜の景観形成と長良川」  
『長良川中流域の文化的景観保存調査報告書』岐阜市教育委員会、平成27年

## 特集 川原町～川湊として 発展してきた歴史

